

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

生徒たちに、中学校を卒業してから、出会った人と協働して生活するための「たくましさ」の土台をつくるために、道徳科の授業を要として、様々な活動を行ってきた。授業の中で、仲間とかかわるだけでなく、活動の中で、地域の方々や社会で活躍する人々とかかわることができ、「たくましさ」の土台の築きの一步を踏み出すことができた。

1 研究推進校の概要

学 校 名	所 在 地	電 話 番 号	生 徒 数	備 考
蒲郡市立西浦中学校	蒲郡市西浦町原山1番地24	0533(57)5245	99人	

2 研究課題

- (1) 考え、議論する道徳を目指した、発問、問い返しの工夫についての研究
- (2) 多様な価値観に出合わせ、実感を伴わせるための学習活動についての研究
- (3) 物事の見方を広げ、思いを深めるための研究
- (4) 地域とともに進める道徳教育の研究と教材開発

3 研究主題とその設定理由

研究主題名

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実
－「考え、議論する道徳」の実現－

本校は、全校生徒100名前後の小規模校である。一小一中で、9年間ほとんどメンバーが代わることのない集団の中で生活してきた生徒たちは、互いの個性を理解し合い、学年や男女の壁なく協力し合うことができている。しかし、本校の生徒たちは卒業後、取り巻く環境が大きく変化する。これまで経験したことのない大きな集団の中に身を置き、多くの人と一から人間関係を築き、これまで出会ったことのない価値観の人たちと生活することになる。広い社会に飛び出していく生徒たちが困難にぶつかったとき、逃げることなく乗り越えていく「たくましさ」を養いたいと願った。

「たくましく生きること」に必要なのは、多様な価値観をもつ人と、良好な人間関係を築き、直面する様々な問題に対し、協働しながら、よりよい方法を見出していく力だと考えた。この力は、道徳科の目標にある「よりよく生きるための基盤となる道徳性」につながるととらえ、一昨年度から「道徳科の授業」を核にして、研究を進めてきた。問題を自分ごととしてとらえ、仲間との話し合いを通して、多様な価値観に触れ、自己の生き方について考えを深めたり、新しい見方や考え方を生み出したりする授業を積み重ねることで、社会の中で生き抜く「たくましさ」の土台を築いていきたい。

4 研究の概要及び特色

(1) めざす生徒の姿（道徳科の授業を核に、社会の中で生き抜く「たくましさ」の土台を築く）

- ・問題を自分ごととしてとらえ、主体的に向き合う生徒
- ・物事を多面的・多角的に考える生徒
- ・自分の考えを深めたり、新しい見方や考え方を生み出したりする生徒

(2) 研究の仮説

道徳科の授業において「発問」や「学習活動」を工夫し、また、道徳科の授業を「さまざまな場面や活動につなげる」ことで、将来、社会の中で生き抜く「たくましさ」の土台を築くことができるであろう。

(3) 研究の手立て

【手立てⅠ】「自分ごととしてとらえ、多面的・多角的に考えさせる発問」

- ・様々な立場から考えさせる発問
- ・自分に引き寄せて考えさせる投影的発問や多様な見方を引き出す批判的発問
- ・生徒の心を揺さぶる問い返し

【手立てⅡ】「多様な価値観に出合わせ、考えを深めさせる学習活動」

- ・一人一人の考え方や感じ方を交流し合う少人数での活動（ペア、グループ）
- ・一人一人の意見を可視化する工夫（ホワイトボード、意思表示カードなど）
- ・実感を伴った体験的な活動（役割演技、動作化など）
- ・地域の人や実際の活動に出会わせる工夫

【手立てⅢ】「道徳科の授業を様々な場面や活動につなげる工夫」

- ・特別活動や総合的な学習の時間を用いて、地域の人材や本物と関わる活動、体験活動などを関連させた授業の構想
- ・複数時間を関連付けた「道徳科の授業」の構想
- ・授業で膨らんだ思いや考えを言語化した振り返りの累積
- ・他の道徳科の授業や活動との関連や流れが分かる教室掲示

(4) 地域とともに進める道徳教育

西浦中学区は、まわりを海に囲まれている地域である。一小一中であることもあり、「自分たちの学校」という意識も高く、学校教育にも大変協力的である。このような恵まれた地域環境という利点を生かし、地域の方を講師に招いたり、地域の行事に積極的に参加したりすることで、道徳的な力を育てていきたい。

5 研究計画

月	実施内容	行事等
4月	・教職員への研究内容、研究目的の周知と共通理解	・マナー講座（2年生）
5月	・研究組織と研究計画の策定・道徳年間計画の作成 ・研究主題・仮説の設定 ・研究の概要 ・道徳教育についての生徒及び教職員の意識調査 （1回目） ・授業研究（特別支援学級）と研究協議	・修学旅行（3年生） ・職場体験（2年生） ・デイキャンプ（1年生）
6月	・授業研究（3年生・2年生）と研究協議 ・第1回ディスカッション集会	・資源回収 ・生徒会ボランティア活動 ・部活動激励会
7月	・授業研究（1年生）と研究協議 ・加藤源重さんに学ぶ会 ・学校保健集会 ・外部講師による校内研修会 （講師：上越教育大学大学院教授 早川 裕隆先生）	・薬物乱用防止教室
8月	・授業実践のまとめ ・蒲郡市夏期集中研修への参加	・のびる子作品展・のびる子ショップ（特別支援学級）
9月	・校内研修 （講師：知多市立つつじが丘小学校 主幹教諭 高石 幸信先生） （講師：東三河教育事務所 家庭教育コーディネーター 安藤 雅章先生）	・体育大会
10月	・学習指導研究会（蒲郡市教育委員会委嘱） ※全学級道徳科の授業公開及び研究協議	・写生会 ・前期終業式・後期始業式
11月	・外部講師による校内研修会 （講師：日本道徳教育学会近畿支部理事 永吉 洋子 先生） 永吉先生による示範授業 「教科書を使った『考え、議論する道徳の授業』をどうつくるか」 ・第2回ディスカッション集会	・西中文化の日（文化祭） ・合唱コンクール ・資源回収
12月	・学校保健委員会 命のマガジン“メッセンジャー”編集長 シンガーソングライター 杉浦貴之氏の講演 演題「命はそんなにやわじゃない ～がん余命半年からの生還の軌跡～」	・はあとぷろじえくと （地域のお年寄りとの交流）
1月	・道徳教育についての生徒及び教職員の意識調査 （2回目）	・自然教室（2年生）
2月	・成果報告書完成	・卒業生を送る会
3月	・1年間の取組の反省と改善点	・卒業式

6 これまでの取組と成果

(1) 外部講師を招聘した研修

(ア) 道徳科研修会 ～役割演技を中心として～

講師 上越教育大学 大学院教授 早川裕隆先生 (令和元年7月29日実施)

上越教育大の早川先生は、役割演技研究で著名である。直接研修をいただけるという貴重な機会を得たので、本校教職員ばかりではなく、市内の教職員も参加しての研修とした。参加教職員が、教師役や演者、観客となって模擬授業を行い、役割演技を体感することができた。

研修日程

研修① 10:00～12:00

- ・講義「特別の教科道徳の理解」
- ・教材「くりのみ」による役割演技を用いた模擬授業

研修② 13:00～15:00

- ・教材「一冊のノート」による役割演技を用いた模擬授業



<参加者の感想より>

- ・自分自身の役割演技の認識が全く違っていたことに驚き、そして正しく認識できたことに喜びを感じている。「演技をするから体感できる」というのが今までの認識だったが、「演技をする人を見ることによって、感情を「見ている人が」体感できる」という道徳的心情に迫る役割演技を、是非実践したいと思った。
- ・役割演技を見ている観客でしたが、「僕」にとっても感情移入してしまいました。これを生徒にも体験させて学習を深めてほしいと思いました。演者の選定がとても悩むところであるので、勉強していきたいです。

<成果と課題>

参加者の感想にもあるように、役割演技は実際に演技をする演者よりも、観客の方がその演技を見ることによって道徳的心情に迫れることを知ることができた。このことによって、役割演技を取り入れた授業をしてみたいという気持ちをもった参加者が多かった。実際に授業を行う場合は、演者の選出や演者の演技のどの部分を観客に注目させるかなど、今後、教師のスキルアップが必要である。

(イ) 道徳科研修会 「教科書を使った『考え、議論する道徳』をどうつくるか」

講師・示範授業 日本道徳教育学会近畿支部 理事 永吉洋子先生

(令和元年11月18日実施)

いつも自分たちが行っているのとは違った道徳科の授業を見てみたいとの思いから、今回は示範授業をしていただける先生に来ていただいて研修を行った。永吉先生は、これまで今回のような示範授業を多数されてきたそうである。今回も本校教職員ばかりではなく、市内の教職員も参加しての研修となった。

<参加者の感想より>

研修日程

○示範授業 14:15～15:05

・教材「足袋の季節」を用いた示範授業

○研究協議会 15:40～16:30

- ・今まで見た先生方とは違ったタイプの道徳科の授業を参観することができました。
- ・ねらいがはっきりしていて、人間としての生き方についての考えを深める授業になっていれば、いろいろなアプローチの仕方があることが分かりました。
- ・「議論＝ディベート」と考えがちですが、「子供たちだけで深めていくことは難しい」という先生の言葉に、今まで感じていたモヤモヤがなくなりました。

(2) 心を揺さぶる問い返しと役割演技を用いた実践 (1年A組)

主題名「生命と正義のはざままで」【D-(19) 生命の尊さ】 教材名「残された水」

生命の大切さについて学ぶ上で、生徒の心に染み込み、深く考え、議論を通して道徳的価値の理解を深める授業をめざした。また、後半に役割演技を取り入れることで、行動や言葉の背景に迫り、全員が自分ごととして考えることをめざした

授業では、「苦しんでいる人を放っておけない」という意見と対立した「他の4人の生存率が上がる」という発言から、「では、ロイは助からなくてもよいと思う?」と問い返した。グループで話し合いが深まり、様々な考えが出されたので、役割演技につなげた。役割演技では、演者の発言を聞いたり、表情を見たりすることにより、登場人物の気持ちをより深く自分ごととして考えることができた。

<生徒の振り返りより>

- ・私は、少しでもロイに生きる希望をあげたいから、ほんの少しでも水を分けてあげたいと思っていました。でも、A(演者)さんの「一人のためにみんなが犠牲になってもいいの?」という考えを聞いて、すごく迷いました。
- ・B(演者)が「助けないという選択肢はない」と言っていて、とても共感しました。でも、Aさんが途中から「それは分かるけど」と言っていたように、ロイを助けたくないわけではなくて、それは分かったうえで全体の命を大切にしていたから、できればみんなを助けたいんだなと気づきました。

<成果と課題>

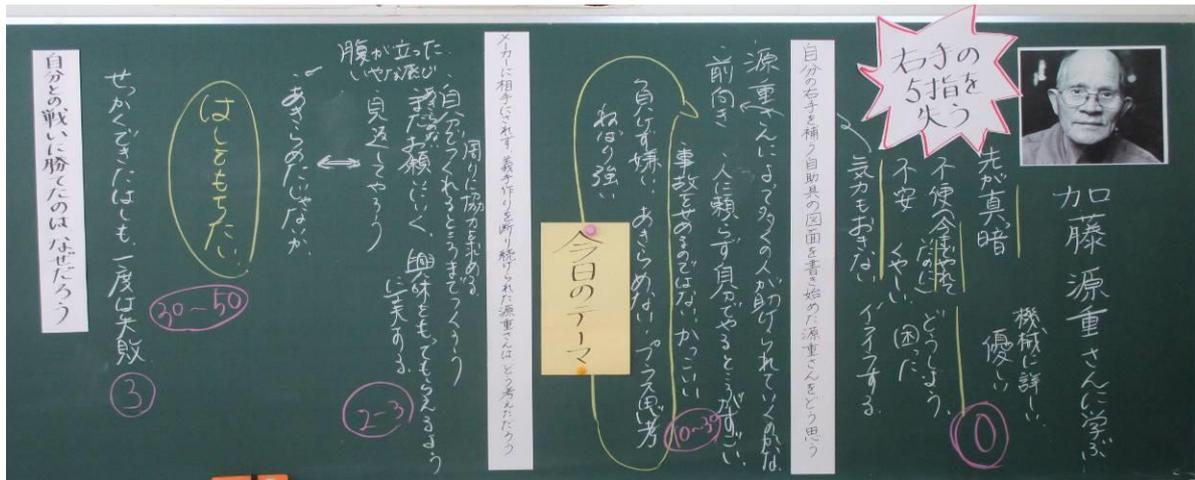
多面的・多角的に考えさせる発問による議論を進めた後、さらに、心を揺さぶる問い返しを行うことで、議論を深めることができた。また、その後に役割演技という手だてを用いたことは、生徒が自分ごととして考えることに有効であった。しか

し、役割演技を行い、命について考えを深めていくにあたっては、50分という時間設定は短いと感じた。

(3) 地域教材を活用した授業実践

(ア) 2年B組 道徳科授業研究 (令和元年6月24日実施)

主題名 諦めずにやりぬく強さ A-(4) 希望と勇気、克己と強い意志
教材 「三河のエジソン」



この教材を用いたのは、加藤源重さんという身近に実在する人物の考え方や生き方を知ることが、生徒自身の心に影響を与え、生徒が自分自身を見つめ直し、夢や目標に向かって粘り強く取り組もうとする意欲を高められると考えたからだ。また、加藤源重さんは豊田市在住であり、西浦在住の方ではないが、この実践を通し、三河の地域教材として紹介したいと考えた。

<生徒の振り返りより>

- ・一度やろうとしたことをあきらめずにやれば、できなくてもいろいろな経験ができ、自分が成長できると思う。
- ・人の生き方や昔の経験を教わるからこそ、未来の自分に生かせることがあるのだと思った。

(イ) 加藤源重さんをお招きして

加藤源重さんに学ぶ会
2年全員 (令和元年7月11日)

授業の後、生徒たちは、「自分らしさ」を生かして生き抜いていくことや「すぐに行動する」ことの重要さなどを知った。さらに、自助具作りはどんな思いから生まれ、どんな仕組みなのかを、源重さんから直接お聞きすることで、生徒自身が、努力し続けることの意味をもち、自分を見つめるきっかけを作りたいと考え、「加藤源重さんに学ぶ会」を開くことにした。



<生徒の振り返りより>

- ・ 自助具はテレビで見るのとは全く違って、とても本格的でした。箸や生活で使うものなども触ったりすることができ、とても良い機会になりました。
- ・ 「何とかなる」は、ありきたりな言葉だけれど、源重さんが言う「何とかする」と言うように聞こえます。源重さんに学んだ諦めないことと、日常の物事に感謝することを忘れないで生活していきたいです。

<成果と課題>

道徳科の授業での内容項目「希望と勇気、克己と強い意志」だけでなく「個性の伸長、思いやり」など、他の内容項目までまたいで、多くの生徒が自分のこととして考えることができた。また、道徳科の授業で、源重さんの生き方にふれ、源重さんの名言を知った上で今回の講演会に臨んだので、想いをもって話を聞くことができた。

(4) 「めざせ！ありがとういっぱい組」をめざした実践

(特別支援学級)

E・F組 道徳科授業研究

(令和元年5月30日実施)

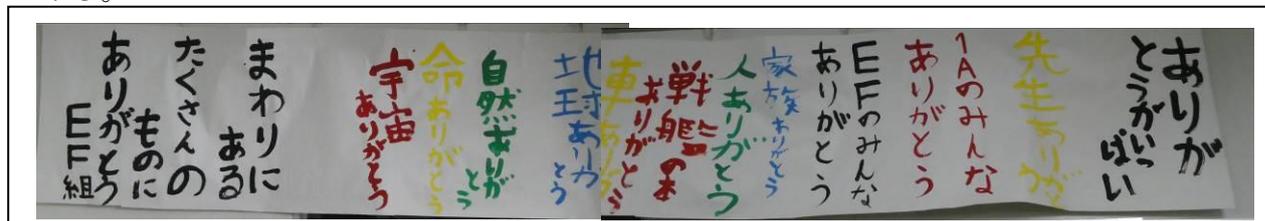
主題名 「めざせ！ありがとういっぱい組」

B-(6) 思いやり、感謝



生徒たちは、他の生徒や先生たちに、「ありがとう」と感謝する場面が多い。そこで今度は、周りの人から「ありがとう」と感謝の言葉をかけてもらえる場面にたくさん出会わせたいと考えた。本実践を通して、満足感や成就感、自己有用感を味わってほしいと願った。また、E・F組「ありがとうの木」に、一つでも多くの「ありがとうの花」を咲かせたいと強く願った。

授業では、「ありがとういっぱい」の詩をつくろうと呼びかけたところ、多くの「ありがとう」が出された。その後、清書したものが、下図の「ありがとうがいっぱい」である。



<生徒の振り返りより>

- ・ 人から感謝される行動をとりたい。
- ・ 今以上に、ありがとうが言えるようにしたい。
- ・ ありがとうをもっと伝えたい。
- ・ 掃除を頑張りたい。

<成果と課題>

この実践を通し、生徒たちに、「ありがとう作戦」に取り組む意識づけをすることができた。また、ありがとうを意識できる教室環境を作ることができた。今後、特別支援学級の生徒たちのこの思いを全校にどう広げるか。そして、地域とのより良いかわり方をどう求めるかが課題である。

(5) 学校保健委員会と関わりをもたせた実践

(ア) がんを扱った道徳の授業 (2年A組)

主題名『いのち』を考える【D-(19)生命の尊さ】教材名「奇跡の一週間」

命について考える教材を道徳科の授業で扱いたいと考えた。なぜなら、小林麻央さんなど、がんで亡くなられた有名人や教科書「新しい道徳」の中の教材の北村さんとの出会いがあったからだ。がん教育の始まりもあり、この教材で『いのち』を考える」を主題とし、授業実践を行った。

命について考えることは生徒たちにとって、とても難しいことだったが、難しいなりに北村さんのことを分かろうとか、気持ちに迫ろうとする姿勢がみられた。例えば投影的発問の場面では、「自分だったら引き受けないけど…」や「引き受けるけど…」というように、生徒の多様な価値観を会話の中から拾い上げることができた。

<生徒の振り返りより>

- ・人には本当に様々な生き方があるんだなと思った。最後まで人のために働く北村さんはすごい。北村さんのように人から認められ、頼られ、それに喜びを感じられるそんな人になりたい。
- ・今まで、「病気の人=かわいそうな人」だと思っていたけれど、今は、「強い人」という考えが生まれました。北村さんの作った紙芝居は、たくさんの思いの詰まったものでした。

(イ) 学校保健集会

「命はそんなにやわじゃない
～あたたかくてたくましい私たちの命～
講師 杉浦貴之氏

生徒に、命についての実感をより強くもたせたいと思い、学校保健集会の中で、がんで余命宣告をされた経験をもつ、杉浦貴之氏に講演をお願いした。シンガーソングライターでもある杉浦氏は歌を織り交ぜながら、心に響く講演をしてくださった。



<生徒の振り返りより>

- ・今生きていることが当たり前ではないと実感しました。がんについて道徳科の授業でも学んだけれど、体験した人から聴くと何か違って、心に刺さるものがありました。愛情を注いでくれた家族、周りの人に感謝をして生きていきたい。

<成果と課題>

道徳科の授業と学校保健委員会との関連を図ったことで、生徒がより深く命について考えることができた。また、生死を分ける体験をされた方から直接話を聞くことで、今ある命が当たり前ではないことに気づき、自分を産んでくれた両親に対して感謝の気持ちをもつことができた。

(6) ディスカッション集会・学校保健委員会

道徳科の授業で培った「考え、議論する力」を、実際の活動場面で生かすために、異学年混合グループによる話し合い活動の場を設定した。

(ア) 第1回ディスカッション集会（令和元年6月14日実施）

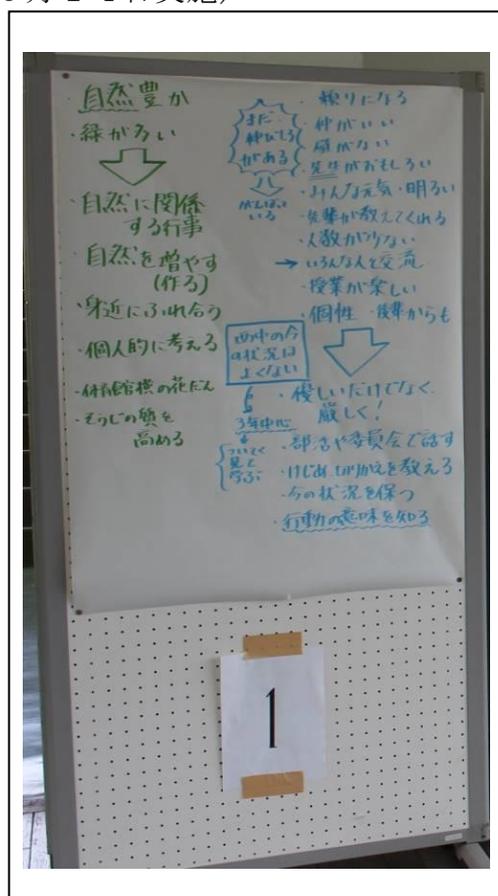
生徒会活動として、「西浦中のよいところ」をテーマにした「ディスカッション集会」を行った。生徒は、3学年混合の20名ほどのグループに分



かれ、意見を出し合った。司会と模造紙への記録は3年生が行った。これは、3年生が道徳科の授業で、小グループの話し合い活動を実施しており、司会や記録をすべての生徒が経験していたからである。

<生徒の振り返りより>

- ・西中のよいところなどを、3学年で考えられたことは良かった。
- ・まとめ方がとても難しかった。 ・話し合いが停滞したときが困った。



(イ) 学校保健委員会（令和元年7月1日実施）

本来、学校保健委員会は「協議会形式」が望ましいとされている。そこで、グループ活動を取り入れることで、生徒はより自分ごととして、自分自身の健康を考えるようになると思った。また、学年混合のグループ編成にすることで、ふだん、なじみのない集団においても、道徳科の授業で培った、聞く力や話す力が発揮されるのではないかと考えた。



<生徒の振り返りより>

- ・ふだんあまり話すことがない先輩や後輩と一緒に考えることができ、交流を深めることができた。先輩の意見は、すごくためになった。
- ・後輩たちの意見をまとめるのが、難しかった。

<成果と課題>

ふだん、なじみみのない集団なので、ほどよい緊張感をもって、話合いに臨むことができた。また、他学年との交流を深めるきっかけとなり、後輩は、先輩の意見から学ぶことができた。ただ、先輩に気を使っているのか、下級生の中には遠慮がちになっている生徒も見られた。すべての生徒が積極的に話合いに参加するためには、繰り返し行って生徒の経験値を増やすなど、さらに工夫が必要である。

5 研究の評価

(1) 研究の成果

- ・価値ある道徳の授業をしたいという、教師の意欲が高まった。
- ・どのような発問をすれば、生徒が自分ごととしてとらえ、多面的・多角的に考えさせることができるのか、深く吟味するようになった。
- ・外部講師を招聘した研修を行うことによって、役割演技などの活用の方法を知り模擬授業や示範授業によって、具体的な授業を構想することができた。
- ・多様な価値観に出合わせるための学習形態（グループ・ペア活動、役割演技、動作化など）を積極的に取り入れるようになった。
- ・地域の人材を積極的に活用するようになった。
- ・特別支援学級の生徒による活動に、全校生徒や職員目を向けさせることができた。
- ・道徳科で身につけた道徳的実践意欲と態度を、他の行事や活動に生かそうとする場面が増えた。

(2) 今後の課題と取組

- ・さらなる道徳の授業力の向上。発問の吟味。学習形態の工夫。地域教材の活用
- ・複数時間にまたがった授業の実践や他教科・活動と道徳科との連携
- ・毎時間の評価の積み上げ
- ・社会を生きるたくましさの土台がどこまで育ってきたかの検証